第一章　一念三千の出処

前回までに述べましたように門祖日隆聖人はこの本尊抄を大きく三つに分けられ、その第一が「本門惣名所摂理具一念三千」です。これも三つに分けられています。そのうち第一章は「一念三千の出処を挙ぐ」とその趣旨をご科文され、第二章は「~~一念三千の名字の明不明を料簡す~~一念三千観心の正体を顕はす」、第三章は「~~重ねて玄文止に約して立処を定め、一念三千を以て滅後の本画の二像本尊の意神となす~~問答して疑ひを決し、理具三千の実体は即ち惣名事具三千に兼ぬることを顕はす」とあります。

第二章、最三章のご科文の意味は後ほど述べることにします。

この第一章の「一念三千の出処」というのはいうまでもなく、一念三千という大事な法義はいったい誰がどこでそういうことについて述べられているか考察するという意味です。

この一念三千という法義はもともと天台大師（五三八～五九七）が述べられたものですから当然、天台宗の教義です。日蓮聖人ももと天台宗に属する清澄寺で得度されたので当初は天台宗の一沙門（僧侶）として修行されていたわけですが、それは一応のことで実際は日蓮聖人は上行菩薩の生まれ変わりとして独自のお立場があり御題目をお弘めになる使命がありました。ですから同じ一念三千ということを言われるにしても天台大師が表面上言われているとおり、そのままではなく天台大師が心に秘めて隠して、日蓮聖人に語ることを譲られた一念三千に関する本当の教えを述べられているのです。いわば日蓮聖人独自の一念三千というべきものでした。そこで天台大師の一念三千を理の一念三千といい日蓮聖人のそれを事の一念三千と聖人みずから区別されています。

一念三千の観法に二あり。一には理、二には事なり、天台、伝教等の御時には理也。今は事也。観念すでに勝る故、大難、又、色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千也。天地はるかに殊也こと也と、御臨終の御時は御心へ有べく候。

（治病大小権実違目　昭定一五二二頁）

とお示しになっていて似ても似つかない、天と地ほど違うと仰せです。つまり名前は一念三千であってもかたや止観という修行をして悟りを得ようとし、こちらは御題目口唱をするというように全く違う別物です。

しかし、門祖聖人のこの大文第一（第一部）に対する御科文には「本門惣名所摂理具一念三千」とあり、これだけ見ますと本門惣名つまり本門の御題目に包まれている中身は天台宗と同じ一念三千なのだというように考えてしまいます。しかし、全く違うと日蓮聖人が仰っているところを見ますと中身も違うと考えた方が自然です。

大体、日蓮聖人が天台大師、または日本天台宗を創設された伝教大師最澄（七六七～八二二）をどのように評価されているかと申しますと、決して古いとか謗法だとかは仰っていません。ただし天台宗という宗門については去年の暦のようなもの、天台過時

といって古くなりすぎて役に立たないと批判されています。これはどう言うことかと申しますと、たとえば日本天台宗は伝教大師の後、慈覚大師円仁、智証大師円珍などという人々が天台座主（天台宗の本山、比叡山延暦寺の貫首）となり、天台宗をすっかり真言宗化、密教化してしまった上に時間が経ちすぎたからです。御書を拝見しますと変容し変質してしまったので比叡山は駄目になったという論調です。それに対し、天台大師や伝教大師は元来、釈尊が法華経をお説きになったとき、その場に居合わせた（会座に連なった）方々であり本来は天台大師は薬王菩薩という迹化菩薩の生まれ変わり、その師の南岳禅師は観音菩薩が姿を変えて世に現れたとされています。また、伝教大師も本来は（本地は）薬王菩薩であったとも仰せです。

像法の中末には観音薬王、南岳天台等と示現して世に出現……

（観心本尊抄　昭定七一九頁）

予倩ら事の情を案ずるに、（伝教）大師薬王菩薩として霊山会上に侍して佛、上行菩薩出現の時を兼て之を記したまふ故に粗之を喩すか。

（曽谷入道殿許御書　昭定九一〇頁）

と言われています。

天台大師、伝教大師は本来は薬王菩薩の生まれ変わりだからこそ日蓮聖人は尊敬されているのですが、一方、それなりに限界があります。薬王という迹化菩薩には御題目のご弘通が許されていないのです。したがって天台大師、伝教大師はうちうちの悟り、内証としては御題目が尊いことはご存じでしたが、周囲に対して外に向かっては御題目の結構なことをご存じであるということすら隠して、あえて御題目の中に内包されている惣名所摂理具一念三千という法理を御題目から切り離して像法時代の中国や日本で止観という修行の中にこめて弘められたのです（別体理具一念三千）。要するに天台大師や伝教大師と後代の天台宗の末裔とはまったく異なり、一方は御題目の有難いことを知りつつも止観という行法を弘められた方、天台宗の末裔はその限界を知らず末法の時代にも止観を弘めたり、天台宗を密教化してしまった人々で「違いが分かる人」と「ワケの分からぬ人」という相違があるのです。[*i]ともかく、この御題目から切り離されて弘められた迹門の一念三千と本門惣名所摂の理具一念三千というものとでは相違があり、これについては教学の上で議論がなされているのですが、話が専門的に過ぎますので省略します。[*ii]

これより本文の解説に入ります。

第一節　一念三千の文要

御科文

正修止観の文要を撰出す

本文訓読

摩訶止観の第五に云く（世間と如是と一なり、開合の異なり）

「それ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に即ち三千種の世間を具す。この三千、一念の心にあり。もし心なくんば已みなん。介爾も心あれば即ち三千?を具す。乃至所以に称して不可思議境となす。意ここにあり。」等云云。

（ある本に云く一界に三種の世間を具すと。）

対校

?ご真蹟は「種」　摩訶止観は千

現代語訳

天台大師の摩訶止観第五巻の第七、正修止観章に、

「そもそも一心に十界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏）を具えている。この十界にもまた、おのおの十界を具えているので百の法界がある。一界には（十種のカテゴリーすなわち十如是と三世間をかけ合わせた）三十種の世間が存在するので百法界には三千種の世間があることとなる。この三千の世間が一念（一刹那・一瞬）の心にある。もし心がなければそのようなこともなかろうが、少しでも心があればすなわち、そこに三千の世間、法界のすべてが凝縮して存在しているのである。（その原理にしたがって、お互いがもし信心を起こし、妙法の御本尊を信じて口唱につとめると人間界の凡夫の心にも仏界が存在するからもともと具わっている仏性が発動し御題目の仏種と結合して、即身成仏することさえできるのである。）　ゆえに不可思議境と称するのである。（そのように称した）意はここに（つまり思慮が及ばないことが現実にあるからで）ある。」云々と述べられています。

（ある本には一界に三種の世間を具えるとあります。）

要点と語句の解釈

〇摩訶止観

天台大師（智顗・智者大師　五三八～五九七）の代表的な著作で法華玄義、法華文句とともに天台三大部と称されます。

摩訶止観という書名の「摩訶」とは梵語（サンスクリット語）のマハーの音写です。「偉大な」、「非常な」という意味で大智度論(巻三)に摩訶とは中国語で大とも多とも勝れているとも訳せるとありまして、いずれにいたしましても私たちの想像を絶するすばらしさを表現している言葉です。

「止観」とは荘子などの影響を受けつつ、中国仏教で醸成された仏教修行に関する概念です。心を外界やさまざまな雑念に行き来させることなく一点に止めるシャマタ

(止)、そして、それを手がかりとして智慧が生まれ、その智慧により対象を観察するビパシュヤナ (観)とを指します。仏教ではもともと、三学といい戒定慧の三つを学習することを必要としていました。その三学のうち戒は戒律、定は禅定の修行（坐禅）、慧とは智慧で戒と禅定によってもたらされるとされました。止観は三学の内、定学、慧学として実習されるようになりましたが、止と観とは互いに補い合って仏道を完成し仏果に至らせるものと考えられ盛んに止観の実修が勧められたのです。

天台大師は「摩訶止観」によってそれまで、断片的にいろいろな経典に述べられていたり実修されていた止観をすべて包括し、統合したのです。

この書は随の開皇十四年（五九四年）に荊州玉泉寺の夏安居(インド以来の戒律により夏、昆虫が育つ頃、土の中の虫を踏まないよう、外で修行していた僧侶や僧尼たちが寺院に集まり屋内での修行に精進したり学問を修める期間)で講義したその内容を弟子の章安大師・灌頂が筆録したうえ校訂編集を施したものです。そのため、他書もそうですが、どこまでが天台大師の説でどこからが章安の見解であるかが判然しないと最近は言われるようになりました。しかし、師の説に対して大胆な改変を行うことは常識的に考えにくいことでしょう。また、筆録の場合には、一度作成した草稿を本人が見て了承するという方式に従うことも通例でしょう。ですから、基本的には天台大師その人の説が述べられていると見てほぼ差し支えないのではないでしょうか。

法華文句（禎明元年　五八七年に
光宅寺で講述、十巻）は法華経の文々句々に注釈を施されたもので、法華玄義は（随の開皇十三年、五九三年に建業で講述、十巻）は「妙法蓮華経」の経題について解釈をした書です。ですから、玄義、文句はどちらかと言えば理論的な面（教相）について明らかにした書、それに対して摩訶止観は止観実習のための実践面（観心）を説いた書ということができます。しかし、文句と玄義に明されている大事な法華経の実践についての指南があり、これは私たちに大いに関係があるのです。

天台大師には実践修行に関する書として摩訶止観の他に
次第禅門　十巻
六妙門　　一巻
小止観　　一巻
があります。これらはすべて、禅法について明らかにしたものですが、このうち次第禅門は漸次止観を六妙門は不定止観を明したものですが、これらは従来の伝統的な実践法です。摩訶止観は円頓止観を明したもので天台大師の己心中所行之法門、天台大師自身の悟りにもとづくもので独創性に富むものです。円頓とは円満円融にして頓極頓足の義、完全なる教えと修行という意味です。もともとこれら三種の止観、漸次、不定、円頓の止観は天台大師がその師、南岳慧思禅師から受け継いだものとされますが、そこに創意工夫を盛り込んで一大体系を作り上げたわけです。

具体的に言いますと六妙門（六行観）とは数息（息を数えて心を静めること）、随息

(強いて息を数えないで息の出入りに随って心を散らさないようにすること)、止心(心を息め慮りを静める)、修観(対象を明了に観察すること)、還(行者の能観の心を観察して、その無実であることを了知すること)、浄(心に所依なく妄想の波が起こらないこと)の六つで、これにさらに九想(欲望を捨てて惑いを離れるために人の死体の相を九通りに観察すること)、八背捨(別名、八解脱とも言い、人の不浄な場面を想像したり実際に見たり、反対に浄い所を見たり、さまざまな　禅定を実践して執着を断つ)、四念処(この身は不浄であると観ずる身念処、感覚は苦痛であると観ずる受念処、心は無常と観ずる心念処、法は無我…すべてのものには実体がなく永遠性はないと観ずる法念処の四つ)などの実践法を再構成し四種三昧、十乗観法、十境、二十五方便としてまとめ上げたもの、それが摩訶止観です。

いずれにしても摩訶止観は止観の実習のために天台大師が示されたもので実に幅の広い修行体系です。その構成を見ると大意・釈名・顕体・摂法・偏円・方便・正修と(以下不説)果報・起教・旨帰の十章が柱で第七章の正修で観法の対象を十種類に分類して各々十乗観法を用いて完全に止観を体得する工夫がなされています。

摩訶止観の構成については仏教事典などを参照ください。

〇それ一心に

それは発端の辞といい、何かを言い始めるときの言葉です。

一心というのは言うまでもなく、心のことですが、では誰の心かということが問題となってきます。この摩訶止観という書はもともと中国天台宗の基礎を築いた天台大師の著作ですから、このことについての論議は中国天台宗でもあり、日本でも論争がありました。

結論から申しますと、天台宗では大体、この一心は「凡夫の一心」「行者因迷の一心」「六識心」(普通の意識)、当宗では一心とは「久遠本仏の一心」「九識本覚の一心」とします。

一念三千とは、一念の心、一瞬の心に　三千の世間、法界のすべてがこもっているという教理で、これを深く観ずるのを一念三千観といいます。

十界とは十種の衆生の世界で、生きとし生けるものは十種の世界によって成り立っているとします。

十界あるいは十法界を下から申しますと地獄界、餓鬼界、畜生界(以上を三悪道、次の三を三善道ともいいます。)、修羅界、人間界、天上界(以上を六道といいます。あるいは六趣ともいいますが、道でも趣でもどちらも梵語のガティという言葉の翻訳で行き着くところ、境遇という意味です。また、六凡とも称し、死んでは生まれ変わり、せっかく天上界に達しても、時が来て果報が尽きれば地獄に堕ちるというように、この六つの世界を輪廻しくるくる変化しその轍から脱することができません。)さらに、声聞界(仏の声を聞くという意味で小乗仏教の部派を作り、阿羅漢果という果報を得るために修

行し厳密な戒律を守る出家者たち)、縁覚界(十二因縁という真理を独りで悟ろうと山野で修行する人々)、菩薩界(自分の悟りより他者の救済をもっぱらとして六度の修行をする人々)、そして仏界、以上の十界によって衆生界を構成しているとしています。

この十界は独立して存在するのではなく、お互いにお互いが含まれ具わっているとされます。これを十界互具といい十界のそれぞれがあい互いに他の九界を具足するとします。

これは法華経の迹門に明される諸法実相や二乗作仏という教理に根拠があります。それぞれの世界に他の世界を内在しているからこそ、動きや変化が起こり六道輪廻が成り立ち、すべての世界の衆生も成仏できるのです。さらに、仏界に地獄界を具しているからこそ仏は慈悲を発動して地獄の衆生までも救済することができるのです。

同様に仏界に餓鬼、畜生など六道と声聞・縁覚・菩薩界を具足しているからこそ、突きつめれば仏心に十界を内在しているからこそ、それらの衆生を成仏させることも、衆生が成仏することもできることになるのです。

こうして十界に十界を互具するから百法界が成立し、それに三世間と十如という現象世界の三つのあり方、十種の存在のカテゴリーを考え合わせて乗じますと三千種の世間、世界があるといえます。

このように一心に三千種の世間が存在する、すなわち心に他の精神的な存在にしろ物質的な存在にしろ宇宙全体が互具互融している、溶け込んでいるという理を観じ、これを仏教の禅の修行の一種として実修したのが要するに天台宗です。この場合は、自己の心を見つめますから、一心とは行者の己心とします。行者は凡夫ですからその心は通常の意識下(第六識)の世界にあります。言い換えればその一心は悟りに至っていませんので迷妄の心、陰妄心ともいわれます。

ところで日蓮聖人はこの摩訶止観をただ天台宗の止観修行のための書ではなく、密かに御題目ご弘通のために著された書と受け取られておられます。つまり、何度も申しあげますが、天台大師は本来、御題目の功力をご存じで、不本意ながら大師が生存された時代は像法の世であるから、その時代とその時代の人々の機根に合わせて止観実修を勧められた、そこでその指南書を摩訶止観として撰述されたものの、本当にその書の中で明らかにされているのは本門の一念三千、事の一念三千の観法(信行観心)であり、御題目口唱の根拠を示されていると了解されたのでした。

そういう立場で読みますと、この一心というのは行者の一心ではなく、仏の一心となるのです。あるいは九識(仏性)について論じているとするのです。なぜかといえば、この一心は世界全体といってもよく、その一心が迷妄の凡夫心であるとするなら凡夫心に仏心が反対に包み込まれてしまうことになります。そして凡夫の心の中に仏心を観じていくというのは、あくまでも自力の修行、止観観行を通じて悟りを切り開くというものとなります。

反対に一心を仏心とするなら、仏心こそ世界の根本であり、その中に地獄、餓鬼、畜

生など三悪や六道も具しているということになります。凡夫の側からいうならば、一心とは信心ということができます。仏の一心を信じる信心（九識本法の上の一心）により仏と同化することとなり成仏するのです。

忠師見聞に（刊本六十六～七頁）

此刹那の一念の底に信心の一念、これあり。この信心の一心とは九識本法の上の一心也。

仍て「それ一心」云々を信心と心得れば、十法界云々も事具の十界と意得、理具三千も事具の三千と意得、不思議境も事の不思議と意得る也。

（原文はカタカナ混じり和漢混交文）

とあります。[iii]

また、日芳記にも

当家の一念三千は九識本覚の佛・菩薩の悟念也。此念とは無疑曰信の信心をいふ也。

とあります。

さて、実はこの一心について天台大師自身のはっきりした解釈が明示されていませんので、中国の趙宋（九六〇～一二七九）天台において論争が起こりました。有名な山家、山外派の争いです。志因の法系の源清（？～九九九頃）と慶昭（九六三～一〇一七）智円（九七六～一〇二二）などは「一念三千」の一念を「霊知の本源」として真心観を唱えました。しかし義寂の法孫である四明知礼は日常起こる一刹那の迷心、介爾陰妄の一念を止観での観察の対象とする「妄心観」を唱えました。そして自ら天台の正統(山家派)を以て任じ源清などを天台の本家以外であるとして「山外派」と呼びました。また知礼は山外派の大乗起信論という華厳宗の論書に基づく随縁真如、不変真如に関する説は華厳宗と同じで別教にすぎないとも批判しました。

四明知礼の説は迹門の一念三千にこだわり法華経本門の種熟脱・三益化導という御法門を知らないための誤です。インドには歴史の観念もなかったのですが、法華経本門には時間と救済の概念が導入され、久遠本仏がどのように遍く一切の人々を救い尽くすかという壮大なプログラムが提示されています。永遠なる佛界と永遠なる菩薩界だけが存在していた…いわば真理の世界からどのようにして現実界が生まれ、どのように展開されていくのかということが説かれています。なるほど随縁真如、不変真如という用語は華厳教学から生まれた言葉ですが、もともと法華経本門には、考え方としていわば本仏縁起ということが説かれています。

中国の天台宗と華厳宗との間には、かなり交流があり、お互いに影響を受けたという説を今の仏教学者は良く口にしています。たとえば元・東大教授の田村芳郎博士は「鎌倉仏教思想の研究」などで、その辺の事情を解明しています。確かに、これらを見ると交流を重ね教学的にも似通ってきた節があるとも解することができます。たとえば、

天台宗の第六祖、妙楽大師湛然（七一一―七八二）と華厳宗の清涼国師澄観（七八三～八三九）とは論争や法義の応酬をしていますが、そうしているうちに互いに近づいてくることはあるものです。不変真如、随縁真如という言葉を大乗起信論から取り入れて使い始めたのは妙楽大師です。[iv]しかし、用語が似通うのは論争をしていれば当然のことで、共通の用語を使わなければ論争ができないからです。そして、不変真如、随縁真如という言葉を使って表現してもよい思想が法華経本門に語られているからこそ、それが可能だったわけです。

〇十如是

法華経の方便品に

「仏の成就したまへる所は第一希有難解の法なり。唯だ仏と仏とのみいまし能く諸法の実相を究尽したまへり。いわゆる諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」

とあり、これは「仏と仏のみが諸法の実相を見きわめることができる。すべてのものをありのままの相(属性)で、ありのままの性(本質)で、ありのままの体(実体)を、力(潜在的能力)を持ち、何かに作きかけ(作用)をして、因(原因)となり、縁(条件)となり、果(結果)を受け、報(果報)を受けている局面そのままを、そして本末究竟等（相から報に至るまでの九つの事柄が究極的に一つであること)という十種のカテゴリー・範疇において如来は諸法の実相を究め尽くされる」と説かれています。

諸法（もの）を中心に考えますと、すべてのものが相、性、体、力、作、因、縁、果、報、本末究竟等の十種の範疇において生起、活動し存在することを指すと解釈できます。

〇三世間

世間の世とは遷流ということで変遷し流れる、移ろい行くという意味、世間の間は中を意味し、「世＋間」で移ろい流れ行く現象世界を意味します。

三種世間とは何を中心として見るかにより、この現象世界を三つに分類したものです。

当宗は龍樹菩薩の大智度論の説により三種世間の三種とは衆生世間（仮名世間）・五陰（五蘊）世間・国土世間の三種とします。

衆生世間とは生存し活動している行為者、主体（正報）、生きとし生けるものをさし、国土世間は山川草木国土など環境世界、五陰（五蘊）世間とはそれらの構成要素を別に立てたもので素材として存在している様態をあらわしています。

〇介爾　わずか一刹那の心。

〇世間と如是と一なり。開合の異なり。

日蓮聖人がご引用された摩訶止観の御文に「十如是」の記述がなく、しかも十如を計算に入れた「三十種の世間」、「三千種の世間」と繰り返して世間という言葉だけを出していることに対する釈明です。

言葉は世間と如是とは異なるが、本質にかわりはなく、開けば三千種世間、合すれば十如ということになります。これを開合の異というわけです。

〇ある本に云く一界に三種の世間を具すと。

これは、そのような記述がある異本が存在していたことを示すもので、泉日恒上人の講話によりますと「阿闍梨静算の心地教行決六巻本の第五巻」中に引用されている異本と同種の本と推定されています。

注釈

*1　日蓮聖人は他にも次のように御妙判されている。

「南岳大師は観音の化身、天台大師は薬王の化身なり等云云。若し爾らば霊山に於て本門寿量の説を聞きし時は、之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の時に非ず。故に妙法の名字を替へて止観と号して、一念三千、一心三観を修し給ひしなり。但し此等の大師等も南無妙法蓮華経と唱ふる事を自行真実の内証と思食されしなり。

（当体義鈔　昭定七六七頁）

「止観に十章あり。大意、釈名、体相、摂法、偏円、方便、正観、果報、起教、旨帰なり。前六重依脩多羅と申して大意より方便までの六重は先四巻に限る。これは妙解迹門の心をのべたり。今依妙解以立正行と申すは、第七の正観十境十乗の観法、本門の心なり。一念三千此よりはじまる。一念三千と申す事は迹門にすらなを許されず、何に況や爾前に分たえ（絶）たる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限る。」

（十章鈔　昭定四八九頁）

*2　このことについては開導日扇聖人が「法門合せ」（扇全三十二巻三四五～六頁　大正14年9月長松堂全集所収）に取り上げられている。

これを拝見すると本尊抄の結文に「一念三千をしらざるものに佛大慈悲を起して妙法五字の内に此珠をつゝみて末代幼稚乃頸にかけさしむ」と遊ばされた、その一念三千は理か事かという問題について論議がなされている。

これに対し結論から言えばどっちとも言える（持ちという判定）と仰っているのであるが、これはこの大文第一の御科文の「惣名所摂理具一念三千」ということに関する事柄と同一内容である。開導聖人は結論として

「されば事三千に理三千はつゝまれたりと心得て忠師は五字の上の能納所納を註し給へり。開山の御文段には台家智者解行の理具三千を所納として事行妙法を能納とし給へり。されば本尊抄のはじめに天台の止観第五の文を出し給へる故にこれを御文段には本門の惣名所摂の理具の一念三千とはじめに遊ばしたれば同抄結文の御文段にも本門事行乃妙法五字につつまるゝはかの理具の三千なりと註し給へり。されば忠師は理具の事をいはずして妙法五字の上にて能納所納をたてゝ当家の本意をあらはし給へり。故に開山も一帖抄に事とは口唱の妙法と云々」

とお示しであり、御題目は事の一念三千でありその事の三千に理の三千は当然、含まれている。そして忠師の論点は御題目と一念三千の能納、所納ということであり、事とか理ということに拘泥されているわけではない。それに対して門祖聖人は天台大師が像法に止観観行を流通するため、外適時宜して惣名から所摂の理具三千を惣名と分離し別体として智者の解行のために備えられたということから、惣名所摂の三千を理具三千と仰せになっているとお示しになっている

*3　開導聖人が十界互具について次のように御指南されている。(法門合せ　扇全三十二巻三四一、二頁)

右曰　十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上声聞縁覚菩薩佛界也。この地獄界の一界に又餘の佛界及び九界を具す。されば佛界の一界にも地獄界及び餘の九界を具へたり。十界互ひに具するが故に十界互具也。此互具の十界行者己心の一念の上にあり。これを十界互具といふなり。

左曰　佛界に九法界を具す。九界を惣在するは本因妙の菩薩界也。この菩薩界の九界に皆本果の佛界を具せり。されば第十佛界の上、本果果上に本因妙菩薩の九界あり。その九界本因妙菩薩界に本果の佛界あり。故に佛界久遠九界久遠の十界久遠本門壽量の十界互具とはこれ也。

判曰　右の十界互具は十界羅列の上の互具也。行者己心の上のといへるにも理の一念三千の互具をいへり。左は九界も無始の佛界に具し佛界もまた無始の九界を具ふ。是真の十界互具一念三千本因本果の法門十界久遠の大曼荼羅これなり。開目抄の如し。これ事の一念三千、當宗の本尊なれば申までもなき左勝なり。又行者己心の三千具足といへども本尊抄の御指南にある處の経文の上の十界互具にあらざれば猶更、右はまけ也。

*4　鎌倉仏教新思想の研究　(一九六五年　平楽寺書店)の第一章第六節(七十三頁～)などで論じられている。

---

*i　日蓮聖人は他にも次のように御妙判されている。

「南岳大師は観音の化身、天台大師は薬王の化身なり等云云。若し爾らば霊山に於て本門寿量の説を聞きし時は、之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の時に非ず。故に妙法の名字を替へて止観と号して、一念三千、一心三観を修し給ひしなり。但し此等の大師等も

南無妙法蓮華経と唱ふる事を自行真実の内証と思食されしなり。（当体義鈔　昭定七六七頁）

「止観に十章あり。大意、釈名、体相、摂法、偏円、方便、正観、果報、起教、旨帰なり。前六重依脩多羅と申して大意より方便までの六重は先四巻に限る。これは妙解迹門の心をのべたり。今依妙解以立正行と申すは、第七の正観十境十乗の観法、本門の心なり。一念三千此よりはじまる。一念三千と申す事は迹門にすらなを許されず、何に況や爾前に分たえ（絶）たる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限る。」（十章鈔　昭定四八九頁）

*ii　このことについて開導日扇聖人が「法門合せ」（扇全三十二巻三四五～六頁　大正１４年９月長松堂全集所収）に取り上げられている。

これを拝見すると本尊抄の結文に「一念三千をしらざるものに佛大慈悲を起して妙法五字の内に此珠をつゝみて末代幼稚乃頸にかけさしむ」と遊ばされた、その一念三千は理か事かという問題について論議がなされている。

これに対し結論から言えばどっちとも言えると仰っているのであるが、これはこの大文第一の御科文の「惣名所摂理具一念三千」ということに関する事柄と同一内容である。開導聖人は結論として

「されば事三千に理三千はつゝまれたりと心得て忠師は五字の上の能納所納を註し給へり。開山の御文段には台家智者解行の理具三千を所納として事行妙法を能納とし給へり。されば本尊抄のはじめに天台の止観第五の文を出し給へる故にこれを御文段には本門の惣名所摂の理具の一念三千とはじめに遊ばしたれば同抄結文の御文段にも本門事行乃妙法五字につつまるゝはかの理具の三千なりと註し給へり。されば忠師は理具の事をいはずして妙法五字の上にて能納所納をたてゝ当家の本意をあらはし給へり。故に開山も一帖抄に事とは口唱の妙法と云々」

とお示しであり、御題目は事の一念三千でありその事の三千に理の三千は当然、含まれている。そして忠師の論点は御題目と一念三千の能納、所納ということであり、事とか理ということに拘泥されているわけではない。それに対して門祖聖人は天台大師が像法に止観観行を流通するため、外適時宜して惣名から所摂の理具三千を惣名と分離し別体として智者の解行のために備えられたということから、惣名所摂の三千を理具三千と仰せになっているとお示しになっている

*iii　開導聖人が十界互具について次のように御指南されている。（法門合せ　扇全三十二巻三四一、二頁）

右曰　十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上声聞縁覚菩薩佛界也。この地獄界の一界に又餘の佛界及び九界を具す。されば佛界の一界にも地獄界及び餘の九界を具へたり。十界互ひに具するが故に十界互具也。此互具の十界行者己心の一念の上にあり。これを十界互具

といふなり。

　左曰　佛界に九法界を具す。九界を惣在するは本因妙の菩薩界也。この菩薩界の九界に皆本果の佛界を具せり。されば第十佛界の上、本果果上に本因妙菩薩の九界あり。その九界本因妙菩薩界に本果の佛界あり。故に佛界久遠九界久遠の十界久遠本門壽量の十界互具とはこれ也。

判曰　右の十界互具は十界羅列の上の互具也。行者己心の上のといへるにも理の一念三千の互具をいへり。左は九界も無始の佛界に具し佛界もまた無始の九界を具ふ。是真の十界互具一念三千本因本果の法門十界久遠の大曼荼羅これなり。開目抄の如し。これ事の一念三千、當宗の本尊なれば申までもなき左勝なり。又行者己心の三千具足といへども本尊抄の御指南にある處の経文の上の十界互具にあらざれば猶更、右はまけ也。

*iv　鎌倉仏教新思想の研究　（一九六五年　平楽寺書店）
　　第一章第六節（七十三頁～）などで論じられている。